

ジュリー「波紋」 助言か介入か



ジュリー 国際大会では1999年から正式に導入された。選手がかけた技などを映像機器でチェックし、主審や副審の判定に間違いがあれば助言する。人数は1試合当たり3人。英語では「JURY」で、陪審や審査員の意味もある。

ジュリーの存在の変化は誤審問題と密接に関わっている。国際大会で初めて審判を補佐するようになったのは1999年の世界選手権。その2年前の世界選手権で男子60kg級の北朝鮮選手がかけた技を相手の技と取り違える誤審があり、国際柔道連盟(IJF)が導入を決めた。当時は判定や得点表示の確認、審判が技を見逃した時の助言をする程度だった。

2度目の契機は2007年の世界選手権で導入されたビデオ判定。00年のシドニー五輪男子100kg超級決勝で橋原信一が誤審で敗れて以来、全日本柔道連盟(全柔連)がビデオ導入をIJFに働き掛けて実現した。国内主要大会で今年3月まで6年間、ジュリー

を務めた元全柔連審判委員会委員の高浜久和さん(右)は「ビデオ判定の導入でジュリーの役割は大きく変わった」と話す。試合中、映像をビデオでチェックする役割を担ったのがジュリー。目視と違い、映像で示せるため助言をしやすくなった。

ジュリーの台頭で審判の存在感が薄れている理由には構造的な問題がある。国際大会のジュリーは審判の上部組織に相当するIJFの審判委員会に所属するメンバーで、各大陸連盟から選挙などで選ぶ。委員会はルール変更や大会の審判運営も担っていて「ジュリーは審判より柔道界の立場や権力が上。大会で審判の点数もつけるし、各大会でどの審判を配置するかも決められる」と高浜さんは明かす。

日本ではジュリーの権限について「審判の最終決定を尊重する」と規定されており、ビデオ判定の際も審判と一緒に見る。だが国際ルールでは規定が明確ではなく、ロンドン五輪でも審判はビデオを確認することなく、ジュリーの発言を一方的に聞き入れる場面が多い。

日本代表選手を多く輩出する徳寺学園の山田利彦監督は「07年にIJFのピゼール会長が就任してから、ジュリーの介入が強まったと感じる」と指摘。「今大会はやり過ぎ。これでいいなら審判はいらなくなってしまう」と苦言を呈した。

ロンドン五輪の柔道男子66kg級準々決勝で、韓国選手の勝利としていた審判の旗判定を海老沼の勝利に覆させたジュリー(審判委員)の存在が注目を浴びている。本来は審判への助言や補佐が役割だが、今大会では度々試合を止め、審判を呼び出すなど判定への介入が目立つ。日本の審判経験者は「国際大会ではジュリーの判断が絶対で審判は逆らえない。政治的要因も絡んでいる」と、指摘する。

- 1997年10月 導入などの経緯
- 11月 国際柔道連盟がジュリーの配置を検討開始
- 99年10月 パーミンガム世界選手権でジュリーを初めて配置
- 2000年9月 シドニー五輪で橋原信一の誤審問題
- 06年10月 世界ジュニア選手権で映像機器を試験導入
- 07年9月 リオデジャネイロ世界選手権で映像機器を正式導入
- 12年7月 ロンドン五輪の男子66kg級で旗判定が覆る

(原田遼)